

シリーズ

「私の森林語り」

森林・林業との関わりの中で、
様々な課題に挑戦されている方
の取組を紹介します。

「共に森林で動き、考える」



松本大学 総合経営学部
観光ホスピタリティ学科 准教授
なかざわ ともよ 中澤 朋代

■自己紹介

富士山麓で自然学校の職歴を経て、環境教育・エコツアーリズム・持続可能な観光・自然体験活動をテーマに実践研究を行っています。

■活動内容

爺・婆・父ちゃんの週末三ちゃん農林業の脇で山の沢ガニを捕まえ、川で魚と泳ぎ、脱穀後のもみ殻に飛び込み、大雪にまみれて遊んだ幼少時代を過ごしました。村では常に人に囲まれ、学校の先生もコミュニティの一員でした。大学を卒業して就いた自然学校やN G Oの仕事は、いかに自然との暮らし

の豊かさを継ぎ、活かすかを学ぶ研修でもありました。自然体験が求められる——山村や自然に関わる人の流れを作りたいと、プログラムや仕組みを学びました。



マルチカルチャーキャンプで森の管理を知る

近年の取組み「マルチカルチャーキャンブ（日系ブラジル人学校と信州・飛騨の子どもたちが対象）」では、沿道整備で倒し、放置された間伐材を運ぶ作業をプログラムにしてみました。子どもたちは丸太を動かすのに身振り手振りで意思疎通し、なんとか目的を

果たします。お互いに相手の様子が分かってくると林床の自然を尋ね合っていました。森は手入れして暮らしに利用できることを、体験の上で守り人から直接教わる貴重な体験もできました。



マルチカルチャーキャンプで
間伐材を運ぶ子どもたち

大学では「アウトキャンパス・スタデイ」でバス移動し、国有林の伐採作業を見て考える授業も行いました。山の斜面と寒さは慣れない学生には大きな負荷です。高性能機械が活躍する脇で、女性や高齢の林業士が危険を回避しながら、凍とした姿勢で急斜面を歩く姿を見て、学生は驚いていました。

■メッセージ

自然と向き合うことで人類がそ

の一人と知る。体を動かすと心が動く。自然の中で動き、自ら気づく学びは、現代ではさらに重要だと感じます。

そして、急激な担い手減少が課題の農山村には関係者の多様性が重要ではないと思います。ヒントとなるのはSDGsと持続可能な開発の考え方です。課題を「包括的に考える」、「誰一人取り残さない」ことが不可欠で、その場づくりの一つが体験プログラムでは、と取り組んでいます。

○連絡先

松本大学 総合経営学部 観光
ホスピタリティ学科 准教授
〒三九〇ー一二九五
長野県松本市新村二〇九五ー一
<http://www.matsumoto-u.ac.jp>



国有林での林業見学

